

# 本学学生のパーソナリティーと精神健康度

—エゴグラム及び UPI からの分析—

松 波 慎 介

A study on Personality and Mental Health of Students  
in Kogakuin University by Egogram and UPI

Shinsuke Matsunami

## 1. はじめに

筆者は1983年度以降、本学で担当している保健体育理論の受講生を対象にエゴグラム<sup>1)</sup> 調査を実施し、これをもとに大学生のパーソナリティーに関する研究を積み重ね、パーソナリティーの経年的な変化<sup>2)</sup>、学科別のパーソナリティー特性<sup>3)</sup>、学業成績とパーソナリティーの関係<sup>4)</sup>、自己変容と TA の効果<sup>5)</sup> などについて工学院大学研究論叢に報告してきた。

今回は1991年度入学生を対象に実施したエゴグラム調査と本学が1991年度より実施している UPI (University Personality Inventory) をもとにエゴグラムから捉えた自我状態<sup>6)</sup> の機能的・構造的特徴に表れるパーソナリティーと UPI より得られた精神健康度との関連について検討を試みた。

UPI とは1966年に全国大学保健管理協会に所属する学生相談カウンセラーと精神科医が中心となって、問題のある学生の「早期発見・早期治療」をめざして作成された「精神的健康調査」である。特に、大学の新入生を対象に入学時にスクリーニングテストとして実施し、神経症・心身症・精神分裂病その他学生の悩み・迷い・不満・葛藤などの実態を調査するための簡単な質問紙法である<sup>7)</sup>。

工学院大学では、八王子キャンパスの学生相談室が中心となり、学生の精神的な健康度の実態を調べると同時に、学生相談や精神衛生相談に活用する目的で1991年度より新入生と2年生(1992年度)を対象に UPI を実施している。

註

- 1) エゴグラムとは、対人交流の中に表れる人の行動特性をその基となる自我状態の表出頻度の違いによって説明し分析するために、五つの機能的な自我状態の表出頻度を数量化しグラフに示したものである。詳細は工学院大学研究論叢20号 P200~202, 同研究論叢26号 P172~173 を参照されたい。
- 2) 松波慎介「大学生の Egogram に関する考察」工学院大学研究論叢26号 P171~192 1988
- 3) 同上
- 4) 松波慎介「大学生の Egogram 一第2報一」工学院大学研究論叢28号 P137~150 1990
- 5) 松波慎介「学生の自己変容に及ぼすTAの効果について」工学院大学研究論叢29号 P193~205 1991
- 6) 自我状態とは Eric Berne が創案した Transactinal Analysis (TA) において分析の基本的な鍵となる概念で、Berne によれば『現象的にはさまざまな心理的反応様式の一貫した一つのシステムであり、機能的には一組の一貫した行動パターンである。より实际的に言えば、一つの心理的反応様式のシステムで、それに関連した一組の行動パターンを伴うもの』で個人の人格には構造的に Parent (P), Adult (A), Child (C) の三つの自我状態が存在し、機能的には Critical Parent (CP), Nuturing Parent (NP), Adult (A), Free Child (FC), Adapted Child (AC) の五つの自我機能として区別できるとした。自我状態各々の特徴やTAについての詳細は工学院大学研究論叢18号 P255~261 を参照されたい。
- 7) 松原達哉「UPI (University Personality Inventory)」臨床心理ハンドブック P61 1992

## 2. 対象及び方法

### 1. 調査対象

1991年度前期及び後期に筆者の保健体育理論を受講した1991年度入学生を調査分析の対象とした。

その内訳は、機械科127名、工化科69名、化工科52名、建築科62名、合計310名であった。

### 2. UPI 調査

1991年度新入生全員 (1,205 名) を対象に入学直後の1991年度4月11日に UPI が実施された。(表1)

この内からエゴグラムの対象となった310名の UPI 調査票を抽出し、Lie-scale 4項目を除く56項目について○印をつけた項目数をもとにチェック項目数0の者(0群), 1以上で平均チェック項目数の8.7を超えない者(1~8群), 9以上で平均チェック項目数の2倍未満の者(9~17群), 18以上で平均チェック項目数の3倍未満の者(18~26群), 平均チェック項目数の3倍以上の者(27~群)の5群に分類した。

### 3. エゴグラム調査

対象者の自我状態の機能的・構造的特徴を把握するため機械科62名と化工科52名に

表 1 UPI 調査票

# 健康調査票

1992年4月 工学院大学

1 年 生

学 科 ( ) 姓 名		性 別 ( )	年 齢 ( )	4/2 現在 ( 18・19・20・21・22以上 )		才	自 宅	下 宿	大 学 寮	そ の 他
No. -			現住所 〒		7ホ・方		( )		( )	

これは、あなたの健康の理解と増進のための調査です。  
番号順によく読んで、あなたは最近1年くらいの間に、ときどき感じたり、経験したりしたことのある項目の番号に、軽い気持ちで○印を、ない項目には×印を書いてください。

1 食欲がない	16 不眠がちである	31 赤面して困る	46 体がだるい
2 吐気・胸やけ・腹痛がある	17 頭痛がする	32 吃ったり、声がふるえたりする	47 気にすると冷や汗が出やすい
3 わけもなく下痢や便秘をしやすい	18 頸すじや肩がこる	33 体がほてったり、冷えたりする	48 めまいや立ちくらみがある
4 動悸や脈が気になる	19 胸が痛んだり、しめつけられる	34 排尿や性器のことが気になる	49 気を失ったり、ひきつけたりする
5 いつも体の調子がよい	20 いつも活動的である	35 気分が晴る	50 よく他人に好かれる
6 不平や不満が多い	21 気が小さすぎる	36 なんとなく不安である	51 こたわりすぎる
7 親が期待すぎる	22 気疲れする	37 独りでいると落ちつかない	52 くり返し確かめないと苦しい
8 自分の過去や家庭は不幸である	23 いらいらしやすい	38 ものごとに自信をもてない	53 汚れが気になって困る
9 将来のことを心配すぎる	24 おこりっぽい	39 何事もためらいがちである	54 つまらぬ考えがとれない
10 人に会いたくない	25 死にたくなる	40 他人にわづらわられる	55 自分の姿なぐい気がなる
11 自分が自分でない感じがする	26 何事も生き生きと感じられない	41 他人が信じられない	56 他人に顔をいわれる
12 やる気がでない感じがする	27 記憶力が低下している	42 気をまわしすぎる	57 周囲の人が気になる
13 悲観的になる	28 根気が続かない	43 つきあいが悪い	58 他人の視線が気になる
14 考えがまとまらない	29 決断力がない	44 ひげ目を感じる	59 他人に相手にされない
15 気分が波がある	30 人に頼りすぎる	45 とりこし苦労をする	60 気持が傷つけられやすい

今まで に健康上、精神衛生上のことで問題を感じたことがありますか。      ある・ない

今まで に精神衛生上の相談や治療をしたことがありますか。      ある・ない

健康上、精神衛生上 相談したいことがあれば具体的に書いて下さい。なお、上記の1～60までの問題で特に相談したいことがあれば、その番号を書いてください。

については1991年5月、その他は1991年10月に九大式エゴグラムチェックリスト（九大式 ECL<sup>2)</sup>）を実施した。

a) CP・NP・A・FC・AC の各得点を学科別、UPI 得点群別に平均得点を出し、学科別平均エゴグラム、UPI 得点群別平均エゴグラムを求め、それぞれに自我機能的な特徴の比較検討を行った。

b) CP+NP=P 得点,  $A \times 2 = A$  得点, FC+AC=C 得点とし、学科別、UPI 得点群別に平均得点を出し、学科別平均の PAC 得点, UPI 得点群別平均の PAC 得点を求め、それぞれに自我構造的な特徴の比較検討を行った。

註

- 1) エゴグラム調査の対象者は318名であったが、UPI を受検しなかった者及び UPI の Lie-scale からみて虚偽回答と思われる者8名を除いた。
- 2) 松波慎介「自己変容に及ぼすTAの効果について」工学院大学研究論叢29号 P207 1991

### 3. 結果と考察

#### 1. 学科別にみた UPI 平均得点と精神健康度

UPI を実施した 1991 年度新入生 1,205 名のうち本研究の対象者となった 310 名の UPI 得点を学科別の平均得点で示したのが表 2 と図 1 である。

これによると対象 4 学科全体の平均得点は 8.7 であった。これは中川によって報告された<sup>1)</sup> 1991 年度入学生 1,205 名（提出率 95.4%）の平均得点 9.0 と比べて有意な差は認められない。このことは、本研究の調査対象に偏りがなかったことを示唆するものと言える。

表 2 学科別の UPI・エゴグラム・PAC の平均得点

	n	UPI 得点	CP	NP	A	FC	AC	P	A	C
機 械	127	7.5	8.6	11.2	10.9	12.0	8.5	19.8	21.8	20.5
工 化	69	11.3	8.5	11.5	10.5	11.8	9.0	20.0	21.0	20.8
化 工	52	8.6	9.3	12.9	11.7	13.3	8.2	22.2	23.4	21.5
建 築	62	8.3	8.9	12.4	11.0	13.6	7.9	21.3	22.0	21.5
TOTAL	310	8.7	8.8	11.8	11.0	12.5	8.4	20.6	22.0	20.9

## 本学学生のパーソナリティーと精神健康度

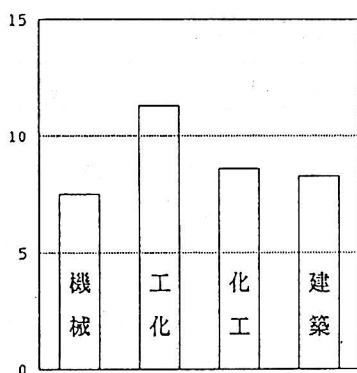


図 1 学科別平均の UPI 得点

また、これは松原によって報告されている<sup>2)</sup> 1991年度に入学した筑波大学学生の UPI 平均得点12.7と比べると約 4 点 (7.1%) 低い得点となっており、1991年度新入生に限ってみれば筑波大学学生より本学学生の方が精神健康度がやや高いと言えよう。

学科別にみると、工化科学生の平均得点が 11.3 と他学科に比べ 2.7 から 3.8 点 (約 4.8~6.8%) 高い得点となっており、対象 4 学科の中では精神健康度が低いことを伺わせる。これに対し機械科学生の平均得点は 7.5 と一番低い得点であるが、その差は全学平均 (9.0) に対してわずか 1.5 点 (約 2.7%) だけで、他学科に比べ精神的に優位な健康度とまでは言えない。

### 2. 学科別にみた UPI の得点分布と精神健康度

本研究対象学生 310 名を UPI 得点が 0 点の者、1 点から 8 点までの者、9 点から 17 点までの者、18 点から 26 点までの者、27 点以上の者の五つの群に分け、各学科ごとにその員数分布を示したのが表 3 及び図 2 である。

これによると健康上の問題も感じていないとする 0 群の分布では、工化科が 4.3 %で、他 3 学科に比べ 10%前後も低い値を示している。

また、全体平均以下の 1~8 群を含めた結果では、機械科 68.5%、建築科 67.7%、化工科 57.7%、工化科 47.8%となっており、工化科の低率が一層目立つ。化工科も機械科、建築科に比べ 10%ほど低率となっている。

また、全体平均 (8.7) よりも 2 倍以上健康上の訴えが多い 18~26 群と 27~群を合わせた分布率でみると、機械科 10.3%、建築科 13.0%、化工科 17.3%に対し、工化科 26.1%と目立って高率になっている。

以上の結果からも工化科に比較的精神健康度の低い学生の比率が高いことが伺われる。

表 3 UPI 学科別得点群分布

	n	0 群	1～8群	9～17群	18～26群	27～ 群
機 械	127	18 14.2 %	69 54.3 %	27 21.2 %	10 7.9 %	3 2.4 %
工 化	69	3 4.3 %	30 43.5 %	18 26.1 %	13 18.8 %	5 7.3 %
化 工	52	8 15.4 %	22 42.3 %	13 25.0 %	7 13.5 %	2 3.8 %
建 築	62	9 14.5 %	33 53.2 %	12 19.3 %	4 6.5 %	4 6.5 %
TOTAL	310	38 12.2 %	154 49.7 %	70 22.6 %	34 11.0 %	14 4.5 %

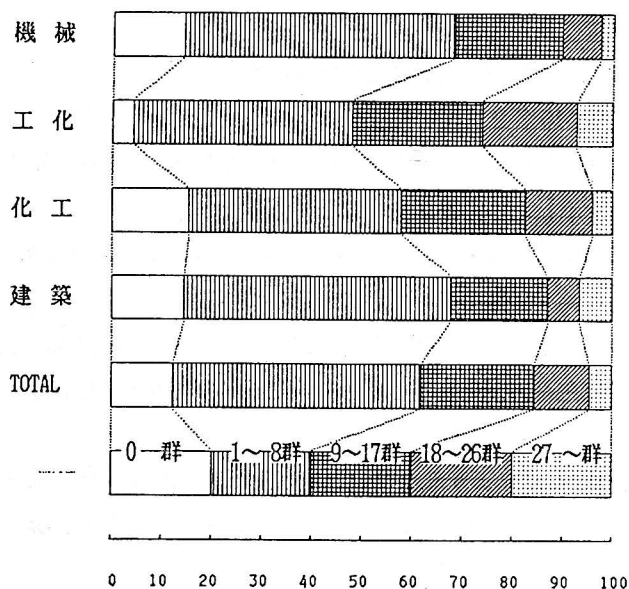


図 2 学科別の UPI 得点群分布

### 3. 学科別平均のエゴグラム及び PAC 得点

研究対象学生 310 名に実施した九大式 ECL を学科別に集計し、機能的な五つの自我状態と構造的な三つの自我状態に分けて学科別平均のエゴグラム得点と PAC 得点を算出し、学科別平均の UPI 得点と合わせて表 2 (P78) に示した。

また、この得点表をもとに図 3 の学科別平均エゴグラムと、図 5 の学科別平均 PAC 得点グラフを作成した。

これによるとエゴグラムにおいては、4 学科とも FC をピークとする M 型を示し、プロファイルの形状からは学科間のはっきりした違いは認められない。しかし、機械、

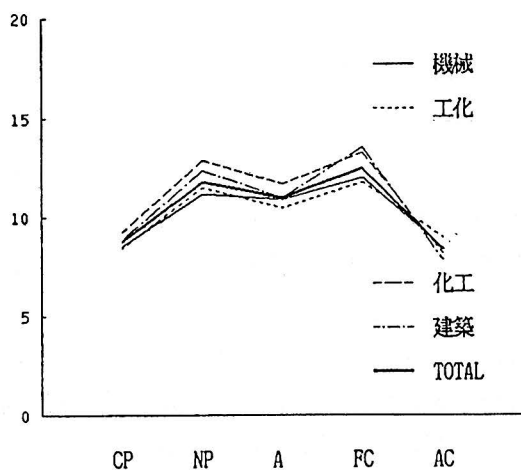


図 3 学科別の平均エゴグラム

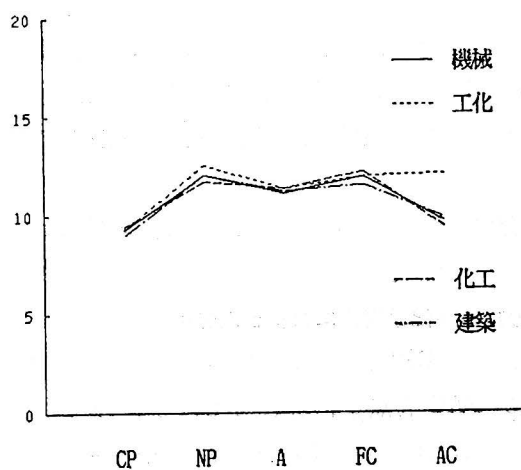


図 4 1983~1988年度生の学科別平均エゴグラム

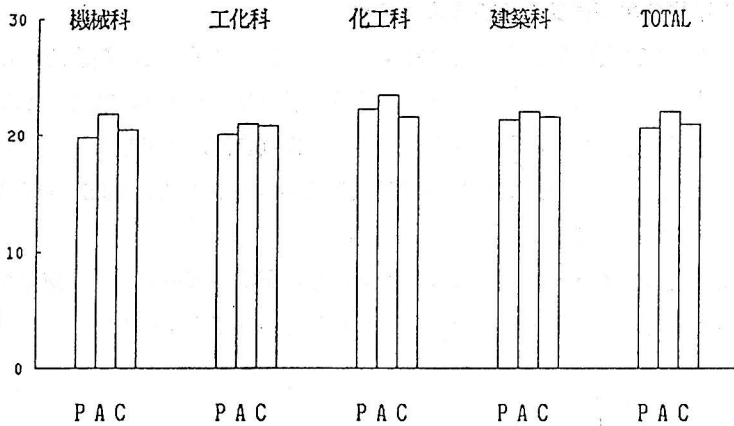


図 5 学科別平均の PAC 得点グラフ

化工、建築の3学科はACをボトムとしているが、工化科だけがCPボトムとなっている。

また、Childの機能的な自我状態であるFCとAC間の差に着目してみると、建築科5.7、化工科5.1と20%以上もFCが大きくなっているのに対し、工化科では2.8(14%)で比較的小さな差になっている。

以上の2点から考えると、工化科の学生の平均像は、他学科の学生に比べると自己主張を抑える傾向があり、周囲に合わせようとする順応的で他者依存的な傾向がやや強いと言えよう。このことは、筆者が1983年度から1988年度までの本学学生を対象としたエゴグラム調査の結果<sup>9)</sup>(図4)とも一致しているがその差異はかなり減少している。

PAC得点においては、4学科ともA主導型を示すが、工化科ではAとCの得点差はわずか0.2(1%)と少なく、他学科に比べA得点が平均3.5%低くなっている。

また、化工科では他学科に比べP得点が高く、その結果PがCよりも高いPAC得点グラフになっている。

しかし、どちらも際立った違いを示すものではなく、学科によるパーソナリティーの違いを示すには至っていない。

#### 4. UPI 得点からみた精神健康度とエゴグラムの関係

表4は、前述した五つのUPI得点群ごとにエゴグラム得点を集計し、各得点群別にエゴグラム得点及びPAC得点の平均値を示したものである。

図6は、この表をもとに作成したUPI得点群別の平均エゴグラムである。

この5群のエゴグラムプロフィールの形状の変化に着目するとUPI得点の少ない

群ではM型を示しているが、高得点群になるほどN型へと、そのプロフィールの形状を変えているのがわかる。

これを表4をもとに低得点群から高得点群までのエゴグラム得点の落差を細かく調べると、CP ではほとんど変化はないが、NP では13.2から9.9までと明らかに低くなっているのがわかる。その落差は16.5%である。また、Aも11.7から9.1まで徐々に低くなっており、その落差は13%である。FC では0群から27～群までの間に5.8と29%もの落差があり、エゴグラムの違いが際立っている。AC では逆に高得点群になるほどAC得点が高くなる傾向があり、その落差は24.5%とFCと共に際立った違

表 4 UPI 得点群別のエゴグラムと PAC の平均得点

	n	CP	NP	A	FC	AC	P	A	C
0 群	38	8.6	13.2	11.7	14.2	6.4	21.8	23.4	20.6
1～8群	154	8.6	12.4	11.4	13.3	7.4	21.0	22.8	20.7
9～17群	70	8.7	11.3	11.1	11.2	9.8	20.0	22.2	21.0
18～26群	34	9.6	11.0	10.5	11.4	11.7	20.6	21.0	23.1
27～ 群	14	8.9	9.9	9.1	8.4	11.3	18.8	18.2	19.7
TOTAL	310	8.8	11.8	11.0	12.5	8.5	20.6	22.0	20.9

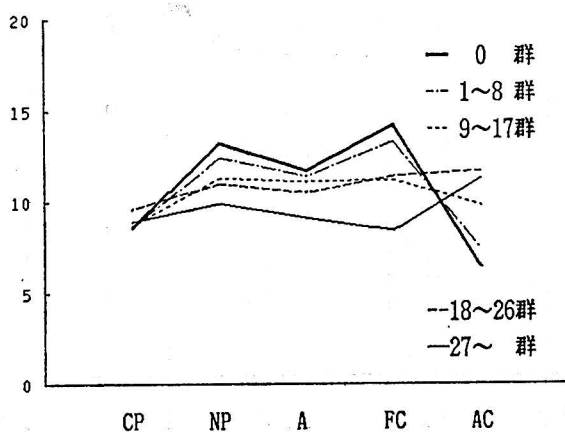


図 6 UPI 得点群別の平均エゴグラム

いを示している。

さらに、この Child の機能的な自我状態である FC と AC の得点差 (FC—AC) に着目して UPI の低得点群と高得点群の違いをみると、0 群が 7.8、1～8 群が 5.9、9～17 群が 1.4、18～26 群が -0.4、27～群が -2.9 となっており、0 群と 27～群との間に 10.7 と極めて大きな差があり、FC と AC の著しい逆転現象を示している。

以上の結果から UPI 得点が低く、精神的に悩み・迷い・不満・葛藤など問題の少ない精神健康度の高い学生ほど自我機能的には物事に囚われず、気楽に自由に感じたまま自己を表現する FC の自我状態が最も高く、周囲に対して温かい援助の手を差し延べ、他者を思いやろうとする NP の自我状態の心的エネルギーも比較的豊富で自他肯定的な立場<sup>4)</sup> から対人交流がはかれるものと思われる。

反面、周囲を気にし、自己内部からの欲求や衝動を抑えて協調し合わせようとする AC の自我状態が最も低いため、他人に合わせて我慢するより自己主張を通す傾向の強いパーソナリティーの者が多いと言えよう。

UPI 得点が高く精神的に悩み・迷い・不満・葛藤などの訴えの多い精神健康度の低い学生群では、高健康度群の学生とは対照的な自我特性を示し、周りの目を気にして自分の感情や欲求を抑え、周囲に迎合しやすく他者依存的他律的な過ごし方をする傾向、自己否定的立場<sup>5)</sup> で人と交流する傾向が伺われる。

## 5. UPI 得点からみた精神健康度と PAC の関係

図 7 は、表 4 の UPI 得点群ごとの PAC 得点を棒グラフに表したものである。このグラフの形状変化に着目すると、UPI 得点の低い低得点群では、A をピークとする凸型を示すのに対し、UPI 高得点群では C をピークとする逆 L 型または凹型にな

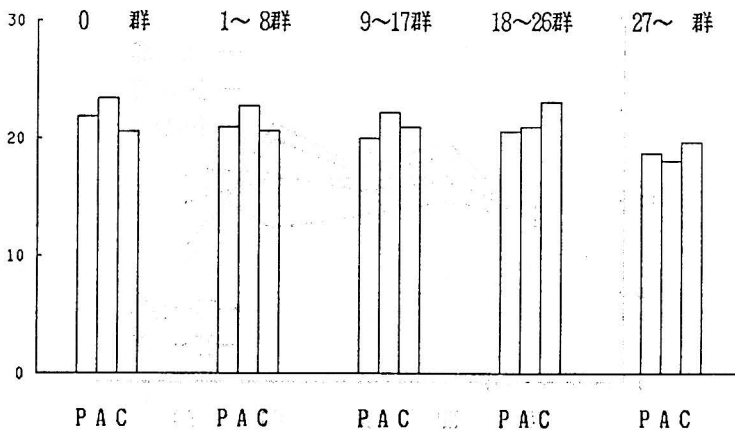


図 7 UPI 得点群別平均の PAC 得点グラフ

っている。

表4から PAC 得点の違いをみても UPI 得点が高くなるにしたがい、A主導型からC主導型へと変化しているのがわかる。つまり、自我構造的にみると Adult と Child の間で明らかな逆転現象がみられる。

また、UPI 得点が高くなるにつれて P 得点が低くなる 傾向もみられるが数値的な差は少ない。

以上の結果から、UPI 得点の低い精神健康度の高い群では、構造的に理性的で客観的な大人としての自我が形成されており、自己統制力と現実認識のしっかりした A 主導型の学生が多いことを伺わせる。

これに対し UPI 得点の高い精神健康度の低い群にあっては、自己内部の感情を Adult でうまく処理したりコントロールすることの不得手な C 主導型の学生が多いと思われる。

註

- 1) 中川幸子「UPI 健康調査に表れた新入生の健康状況」第10回学生相談学会発表論文 1992
- 2) 松原達哉「UPI (University Personality Inventory)」臨床心理ハンドブック P66~74 1992
- 3) 松波慎介「大学生の Egogram に関する考察」工学院大学研究論叢26号 P178~179 1988
- 4) Eric Berne は Transactional Analysis (TA) の理論的背景をなす基本的な概念の一つとして Life Position という概念を提唱している。これは幼児期に親たちとの交流から培われた自他の存在に対する定着した 価値観念に基づいた対人的な態度で、これには 自己肯定・自己肯定他者否定・自己否定他者肯定・自己否定の四つの Position があるとしている。TA の目的の一つに自信と信頼に基礎を置いた建設的で開放的な自己肯定的な立場からの交流がある。エゴグラムと Life Position の関係については工学院大学研究論叢26号 P 187~188 参照されたい。
- 5) 自己否定的立場とは自己不信から対人的に不安や劣等感を持ちやすい Position をいう。(註4参照)

#### 4. ま と め

1. UPI 調査の結果によると、今回調査分析の対象となった 1991 年度入学の機械・工化・化工・建築4学科の学生の中では工化科学生の UPI 平均得点がやや高く、UPI 得点群分布においても低得点群の低率、高得点群の高率が目立った。

このことは、1991年度新入生に限れば、4学科の中では工化科に比較的精神的に健康度の低い学生の比率が高いことを伺わせる。

2. 九大式 ECL 調査の結果によると、エゴグラムプロフィールは4学科とも FC をピークとするM型を示し、プロフィールの形状からは学科間の違いははっきりしない

が、Child の機能的自我状態に着目すると、工化科において FC—AC 値が他学科に比べて小さくなっている。

このことは、工化科学生の平均像として他学科の学生より自己主張を抑えて周囲に合わせようとする順応的で他者依存的傾向がやや強いことを伺わせる。この結果は、筆者が1983年度から1988年度までの本学学生を対象に行ったエゴグラム調査の結果と一致するが、その差異はかなり減少している。

3. UPI からみた精神健康度とエゴグラムの関係を検討した結果では、UPI 得点が低い学生のエゴグラムほど FC と NP が高く、AC が低くなっている。

つまり、自我機能的には物事にあまり囚われることがなく、気楽に自由に感じたまま自己表現ができ、周囲に対しては温かく援助の手を差しのべ他者を思いやろうとする気持ちも比較的豊富な、自己肯定的立場で対人交流がはかれるタイプの学生ほど精神的に健康度が高いと言えよう。

逆に UPI 得点が高く、精神的にさまざまな問題や訴えを抱える精神的に健康度の低い学生は、FC ボトム、AC ピークのエゴグラムを示すため、周りの目を気にして自分の感情や欲求を抑え、他人に迎合しやすく他者依存的で他律的な過ごし方をする傾向が強く、自己否定的な立場で人と交流すると思われる。

4. UPI からみた精神健康度と PAC の関係を検討した結果では、UPI 得点の低い精神健康度の高い学生群ほど A 主導型が際立っており、自我構造的には理性的な自己統制力と合理的な現実認識の持てるしっかりした学生が多いことを伺わせる。

逆に UPI 得点の高い精神健康度の低い学生群では、高健康度群に比べて Adult と Child が逆転しているため、自己内部の感情を Adult で理性的にコントロールしたり、現実を合理的に処理することの不得手なタイプの学生が多いことを伺わせる。

5. 学科別に UPI とエゴグラムの関係をみると、どちらも工化科学生に他学科との相違が認められ、UPI 得点がやや高く、エゴグラムでは FC—AC 値がやや小さい。このことから UPI からみた精神健康度とエゴグラムの間に相関が伺われる。

以上の結果、統計的にみると UPI 得点からみた精神健康度の違いは、エゴグラムの違いとして色濃く反映されており、自我機能的 パーソナリティ 特性、さらには PAC からみた自我構造的な パーソナリティ 特性が精神的な健康度と強く関わり合うことを示すと言えよう。

このことは、精神的に問題のある学生のスクリーニングテストとして実施する UPI とパーソナリティ の自己診断、自己変容、ひいては対人関係改善を目的として実施

するエゴグラムを併用することにより、学生相談カウンセリングの中で学生自身の自己への気づきの促進と健康面での自己改善、自己管理に効果的な役割を果たす可能性を示唆するものと思われる。

一方、UPI による精神健康度の学科別検討については、1991 年度生だけを対象にした調査結果と電気系を含まない4 学科での比較からは明確な分析はできない。この点については中川による全学的な集計の結果と1992年度以降の調査結果を待ちたい。

〔謝辞〕 本学八王子学生相談室中川幸子氏には、UPI 調査票をはじめとする UPI に関する資料の提供並びに助言をいただきましたことを感謝いたします。

#### 参考文献

1. J. M. Dusey (新里訳)「エゴグラム創元社 1980
2. 新里里春 (他)「交流分析とエゴグラム」チーム医療 1986
3. 新里里春「交流分析療法」チーム医療 1992
4. 松波慎介「大学生の Egogram に関する考察」工学院大学研究論叢26号 1988
5. 松校慎介「大学生の Egogram 一第2 報一」工学院大学研究論叢28号 1990
6. 松波慎介「自己変容に及ぼす TA の効果について」工学院大学研究論叢29号 1991
7. 松原達哉「UPI (University Personality Inventory)」臨床心理ハンドブック P61～82 1992

(まつなみ しんすけ 本学助教授 保健体育)